

2026 年 6 月 19 日

## 神戸市会ウクライナ友好議員連盟第 1 回総会議事録

### 【河南忠和】

それでは皆様、本日はご多用のところ、神戸市会ウクライナ友好議員連盟第 1 回総会にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

本連盟の発足にあたり、これまで世話人として準備を進めてまいりました川並忠和でございます。本日は役員並びに規約が正式に承認されるまでの間、僭越ながら私のほうで進行を進めさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

それではただいまより、神戸市会ウクライナ友好議員連盟第 1 回総会を開会させていただきます。本日は本議会連盟の正式な発足にあたりまして、主に規約案並びに役員案、顧問委嘱について皆様のご承認を賜りたいと存じます。

まず初めに規約案についてでございます。お手元に配布しております規約案をご覧ください。本連盟は神戸市とウクライナとの友好親善を深めるとともに、ウクライナの復興支援、人道支援、文化、経済、芸術、スポーツ、科学技術など幅広い分野における交流の推進に寄与することを目的としております。また、神戸市会議員のうち本連盟の目的に賛同する議員をもって組織し、必要に応じて専門的な知見を有する方に顧問としてご就任いただける内容としております。また、会費は当面徴収しない形で活動させていただきたいと思っております。この規約案につきまして、何かご意見、ご質問はございますでしょうか。

それでは本規約案につきまして、原案の通りご承認いただくことにご異議ございませんでしょうか。なければ拍手をもってご賛同をお願いいたします。

(拍手)

ありがとうございます。規約案は原案の通り承認されました。続きまして、役員案と顧問委嘱についてお諮りをいたします。本連盟の役員につきましては、お手元の役員案の通りお願いしたいと考えております。また、顧問につきましては、ウクライナに関する豊富なご経験とご見識をお持ちの岡部芳彦先生にご就任をお願いしたいと考えております。この役員案、顧問委嘱につきまして、原案の通りご承認いただくことにご異議ございませんでしょうか。なければ拍手でご賛同のほうよろしく願いいたします。

(拍手)

ありがとうございます。それでは念のため役員の方をご紹介します。会長の私、川並忠和でございます。よろしくお願いたします。副会長の岩佐建哉議員でございます。副会長の矢野浩慈議員でございます。副会長の松本則子議員でございます。事務局長の白国高太郎議員でございます。幹事の杉本和紀議員でございます。幹事の萩原泰三議員でございます。

以上をもちまして、本日の主要な議事でありました規約案および役員案について皆様のご承認をいただきました。ただいま役員案につきましてご承認をいただきましたことにより、岡部芳彦先生に本議員連盟の顧問としてご就任をお願いすることとなりました。ここで岡部先生への顧問委嘱状の交付を行わせていただきます。岡部先生、恐れ入りますが前にお進みいただけますでしょうか。

委嘱状。岡部芳彦様。貴殿を神戸市会ウクライナ友好議員連盟の顧問として委嘱いたします。本議員連盟は神戸市とウクライナとの友好親善を深めるとともに、復興支援、人道支援、並びに文化、経済、芸術、スポーツ、科学技術等の諸分野に寄与することを目的としております。貴殿の豊富なご経験とご見識に基づき、本議員連盟の活動に対しご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。なお任期は委嘱の日から 1 年間とし、再任を妨げないものとします。令和 8 年 6 月 19 日。神戸市会ウクライナ友好議員連盟会長 川並忠和。

(拍手)

【岡部芳彦】

皆様、本日は在神戸ウクライナ名誉領事館並びに神戸学院大学へお越しいただきましてありがとうございます。岡部でございます。この度、神戸市会ウクライナ友好議員連盟設立に皆様ご参加いただきまして本当にありがとうございます。後ほどお話をしますが、神戸は本当にウクライナとは関係の非常に深い土地でありますので、皆さんと共に一緒に友好関係を深めていければと思いますので、今後ともよろしくお願いたします。どうもありがとうございました。

(拍手)

【河南忠和】

ありがとうございます。今回の神戸市会ウクライナ友好議員連盟の発足に伴い、39 名の議員の各位から超党派にてご参集を賜りました。本当に感謝いたします。本日は様々な方からまたこのお祝いに駆けつけてくださいます。そしてまずは先ほどおっしゃっていただきま

した岡部芳彦先生が今回の本連盟の顧問としてご就任いただいたこと、本当に心強い限りでございます。神戸とウクライナは非常に先ほど岡部先生がおっしゃられたように色んなところで繋がっていることがございます。どうかこれから皆さんできる範囲で着実にこの連盟活動を推進していきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。本日はありがとうございます。

それでは続きまして岡部先生より本日の講義に進みたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

### 【岡部芳彦】

改めまして岡部でございます。よろしく願いいたします。すみません、月曜日に4月のウクライナ出張があつて、5月もウクライナ出張があつて、休講が多かったので、月曜日1限から9時から5時まで、火曜日9時から5時まで連続して講義をすると少し声が枯れてしまひまして、ちょっとお聞き苦しいかもしれませんが、お付き合いいただければと思います。

本日は私の話は30分ぐらいでして、パーティーの冒頭でも詩の朗読があるんですけども、ウクライナの著名な詩人のイリーナ・シュバロワさんという方がお越しでございますので、後ほど10分ぐらいシュバロワさんにも私のお話の後に話をいただきます。おそらくウクライナ語か英語で話すと思いますが、通訳がついておりますので20分ぐらいになるかもしれませんがよろしく願いいたします。

「ロシア・ウクライナ戦争と日本、そして神戸」というタイトルで今日はお話をさせていただきます。ちょっとこの写真をお見せしたいんですね。これアゾフ海に浮かぶ月がすごく綺麗なので、私が思わずシャッターを切った1枚なんですけども。どうでもいい話なんですけど、私あまり旅行が好きじゃないんですよ。先月もウクライナ、その前もウクライナとっておりますけども、実は私よく海外の旅行嫌いでもれぐらい嫌かと言うと、子供がUSJに連れて行ってくれというのが一番ゾッとするっていうぐらい、近くに行くのも嫌いな僕はですね、旅行が嫌いな人って景色の写真をめったに撮らないんですけど、そんな僕が思わず美しいなと思ってシャッターを切った1枚でして、これいつどこで撮られたものかと言いますと、2013年、今から13年前に東ウクライナのマリウポリで私が撮影をしたものです。

マリウポリと言いますと、ちょっと次の映画の冒頭をご覧いただきたいんですけども。

〔映像音声：爆発音やサイレンの音と共に、英語およびロシア語の音声流れる〕

「Russians have entered the city. The war has begun. And we have to tell its story...」

【岡部芳彦】

はい、これマリウポリの20日間という映画でよく行われるんですけども。このマリウポリという町には2022年2月24日にロシアによるウクライナ侵略が始まった時はですね、4つの取材班が入りまして、その取材班が撮った映像を編集して1つの作品に仕上げたものです。昨年のアカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞を獲った作品でもあるんですけど、本当にこれなかなか見るのに勇気のいる作品なんですけれども。このマリウポリという町ではですね、少なくとも2万人のウクライナ市民の方がお亡くなりになったことが確認されておりまして、もうロシア占領地域ですので確認することができません。多くの方が亡くなられたということもありますので、講義を始める前に着席のままで結構ですので、皆さんと犠牲者を悼んで数秒間黙祷してからお話を始めたいという風に思います。よろしく願いいたします。

(黙祷)

ありがとうございました。それではお話始めさせていただきます。改めまして岡部でございます。よろしく願いいたします。

専門はウクライナ研究なんですけども、ロシアとの学生交流なんかに携わってきたこともありまして、ちょっと前半はそんなお話も交えながら少しお話をさせていただきますが、まず下からの2番目の、ちょっと読みにくくて誤植かなと思われるかもしれませんが、2018年に日本とロシアの学生交流の功労でロシアの国立大学である「[ニジニ・ノヴゴロド?]」国立言語大学からいただいた名誉教授の称号は一昨年剥奪になりましてですね。剥奪って難しいんですね。最近履歴書を出すこともよくありまして、履歴書の一番下って必ず賞罰なので僕書いているんですけど、名誉教授剥奪って書くんですけど、それやっぱ書きにくいので、とある講演会の時にご高齢の女性の方が自主返還にするといいんじゃないかということで、それから自主返還にしております、これは誤植ではありませんのでよろしく願いいたします。

ちょっと先ほどマリウポリの話をしたので少し私のことをご紹介させていただきたいんですけども。先週、神戸大空襲の犠牲者の方を大倉山の公園に名前を刻んでおりまして、それは5時間かけて110名読み上げるという行事がございまして新聞にも載ったんですけども。私は今姫路に住んでおるんですが、神戸生まれ神戸育ちでありまして、私の祖父はですね、残念ながらこの神戸大空襲で死んでしまうという形になります。なのでやっぱり先ほどのマリウポリの映像ですとか、ウクライナに出張、先月も、先々月はそうでもなかったんですけど、4月はキーウ出張だったのでかなり空襲も激しくて、空襲でシェルターに行くとうち

の祖父のこととか思い出すなど。祖父ちなみに書いてある通り、発明王エジソンの唯一の日本人助手でありまして、詳しく知りたい方は **Wikipedia** を読んでいただくといいかなと思っております。

本題に戻りまして、僕が着ている服ご紹介したいんですけど、これウクライナの民族衣装でヴィシヴァンカと言います。ヴィシヴァンカというのはどういう意味かということ、刺繍をした服という意味でして、ウクライナの人たちは前に刺繍がどうして入っているかということ、一針一針入れると魔除けになるっていう風に思ってるみたいで、こういう刺繍が入っていると。これ実はですね、ただ10年ぐらい前に一度日本でブームに似たようなものになりました、今でもその名残で楽天とかZozotownで売ってるんですよ。それどうして僕気づいたかということ、大学で授業してると前の学生3人女子学生が着てて、僕あまりにもどうしてこの子たちはヴィシヴァンカを着てるんだろうかと思って驚いて、ラベルを見せてもらおうと中国製だったというオチだったわけなんですけども。なので今日は女性の参加者の方も大勢おられますので、もしかすると知らないうちに買ってダンスに眠っているということもあるかもしれませんので、ちょっと似たようなものがあれば一度ご覧いただければと思いますが。ただこれ戦争が始まりまして、長崎にアナスタシアさんという人がウクライナから避難をしてくまして、それで長崎の大学に通われたんですけど、この度卒業してですね、このヴィシヴァンカとかウクライナの民芸品を売るショップを始められたんですね。ですので日本でも買えるように、昔はウクライナに頼んで2週間ぐらい待ってたんですけど今は2日で来ます。ちなみに今日川並会長が着られているのはまさにUAデザイナーさんで売っているヴィシヴァンカだという、こちらの店で売っているものですので、別に僕こっから1銭ももらってるわけではありませんけども、もしご関心をお持ちいただけるようでしたら一度ご覧いただければという風に思います。

今日ざっと話があちこち行きますので、こんな話をして行きます。

実は私ですね、ウクライナの唯一専門的に学術的に研究する学会のウクライナ研究会の会長を務めておりまして、これ選挙で選ばれますので今年が最後の年、次誰になるのか、僕が最後で任期ですのでもう継続はないと思いますけども。どんな研究をしてるのかという話し出すと退屈な話が一晩中続きますのでやめまして、でも1つだけご紹介させていただきたいのは、ウクライナのカタカナ、首都のカタカナ表記がロシア語に近いキエフから、ウクライナ語に近いキーウに変わったことはご存知の方が多いと思うんですが、これ非常に乱暴に言いますと誰が決めたのかと言うと、これ僕が決めたという。どうして乱暴なのかというお話をしないといけないんですけど、実はこれ2022年2月24日に始まって日本政府がすぐできるウクライナ支援策としてこれを決定したんですけど、このキーウというカタカナの概念が最初に出たのはそれよりだいぶ前のコロナより前の2019年のこと。その時何が

あったかと言いますと、ウクライナが世界中の政府とか空港に対してアルファベット表記をロシア語に近い KIEV というのを、KYIV、こっちがウクライナ語に近いですね、これに変更してくれというキャンペーンを始めまして、実はこれ結構上手く行きましたよ。世界中の空港とか変えていくんですよ。その時に日本政府にはどういう要求がプラスできたかと言うと、カタカナを変更してくれないかと。それで日本政府悪い癖なんですけど、皆さんも役所と対峙される方なのでよくお分かりだと思うんですけど、何か役所ってめんどくさい案件が来ると民間に投げるんですね。それで僕が大学にいましたら、ウクライナ研究会会長宛に外務省から電話かかってきて、ちょっと何か嫌な予感で取ったら、これをウクライナ研究会でガイドラインを決めてくれないかと言われてまして、東京でウクライナの地名のカタカナ表記に関する有識者会議っていうのを開催をしまして。ウクライナ政府の提案なので提案したウクライナ政府の方、あるいは日本政府のオブザーバーで代表に来てもらって、専門家、ウクライナ人、日本人の専門家を集めて会議をしたんですね。その時日本で一番ウクライナ語ができる東京外国語大学名誉教授の中澤英彦先生という方が、キーウというのがいいんじゃないかのご提案をされて、その時たまたま司会をしたのが僕で皆さんに「キーウでよろしいですね」と言って決まったから乱暴に言うのが僕が決めたという、僕のアイデアでも何でもありませんけども。ただこの 2019 年やった時は何かの役に立つのかなと思ったんですが、結果として今の日本政府の原案になりましたので、何でもやっという無駄なことはないなと思いました。

さて、ちょっと話が変わります。今ちょうどワールドカップで日本盛り上がってますね。ということはやっと思わせる時期が来たんですけども、今 2026 年なので 2022 年もワールドカップだったんですよ。日本は決勝トーナメントちょっと 1 回戦で負けてしまったんですけども、ウクライナ代表って 2022 年戦争が始まった時の夏どうだったかという、実はあと 1 勝で決勝トーナメントに行ける、本戦に行けるところで負けてしましまして、僕がすごくがっかりしてたんです。それで僕もそんなメンタルだったので、この暗い戦争の中でウクライナのチームが大活躍すればウクライナにとって明るいニュースなのになと思ってがっかりしてたんですけど、1 週間ぐらいしますと SNS の X で面白い投稿が私の友人が送ってきて、何かと思ったらサッカーのイレブンの図が描いてあったので、僕はてっきり次のワールドカップに向けたウクライナのベストイレブンを選んでも日本の心ある方がいるのかなと思って見ますと、何か漢字でおかしいなと思ったら、このロシア・ウクライナ戦争で日本で出てきたベスト 11 の専門家を選ぼうって暇な企画をしてる人がいたんですね。僕いるのかなと思います、こんな人たち私の知り合いが多いんですけど、僕はウイングバックの位置におりまして、これすごくサッカーに詳しい方、今から見ていただくと分かるんですけど難しいポジションで攻撃もディフェンスもしないといけないっていう難しいポジションなんですけども。メディアには確かに良く出させていただくようになりまして、ちょっと印象に残ったメディア出演を 1 つご覧にかけたいんですけども、それはウクライナのテ

レビに最初の頃よく出てたことです。

〔映像音声：ウクライナのテレビ番組。ウクライナ語の音声に重なって日本語の同時通訳の  
声が聞こえる。〕

#### 【岡部芳彦】

はい、これ大阪でデモがあったことを解説してくれてたんですけど、これ実は戦争が始まっ  
てすぐぐらいの 2022 年 2 月の終わりから 3 月の 1 日だったと思います。この右上の私が  
喋ってる場所は姫路市の私の家の書斎からなんですけど、右下のこのスタジオはキーウ  
のスタジオなんですけど、なんか素敵な感じのスタジオに見えますが、実はこの時はロシア  
軍がキーウを包囲しつつある時で、砲撃がひどいんでシェルターの中の仮設スタジオから  
仮想背景を使って送ってる非常に緊迫したオンエアだったのを覚えております。これ僕は  
そんなにめっちゃくちゃまいわけではないんですけど、ロシア語ウクライナ語を少し話せ  
ますので、彼らは世界にこの戦争どう伝わってるんだらうか、日本にどう伝わってるんだら  
うか、よくわからないというので、それをちょっと伝えてくれということで、非常にいい仕  
事をしたなと印象に残っております。

そんな僕がですね、この 15 年ぐらい熱心に携わってきたことの 1 つが北方領土との交流で  
す。残念ながら日本とロシアの間には領土問題がありまして、日本の主張は左のようになっ  
てます。実際は右のようになってまして、ウルップ島とエトロフ島の間に関が引かれちゃっ  
てると。これよく日本の外務省の実行支配されてる、実行支配されてるって言うんですけど、  
これ完全にまよかしの外交用語で、ロシアが軍事占領する日本の島々です。我々の領土って  
いう形になります。それで、ちょっとさっきの右側のこの地図をですね、少しデフォルメさ  
れてるんで拡大をしたいんですよ。こう拡大をすると、この先にポコッと野付半島というの  
が出てまして、この地図には乗ってないんですけど、野付半島ってのがあって、ここにハマ  
ナス群生地とかですね、お手洗いがあつたりレストランがあつたり、非常に灯台があつて風  
光明媚な観光地なんですけど、こことこの国後島の距離ってのは 16 キロ。これどれぐら  
いの距離かっていうと、ちょうど神戸学院大学のポートアイランドキャンパスですけども、西  
区にうち有瀬キャンパスって大蔵谷のところにあるんですが、あれの直線距離がちょうど  
16 キロ。近いんです。これちなみに、よく日本って周りが海なんでよく外敵から守られて  
るなという方いらっしゃるんですけど、泳いでこれます。僕は無理です。16 キロなんて無  
理ですけど、じゃあこの戦争が始まってロシア軍に徴兵されるのが嫌で泳いで逃げてきた  
方って 1 人いるんですね。だからちょっとこれ実はそれぐらいの距離に北方領土があるっ  
てのをちょっと再認識していただければという風に思います。

そんな北方領土に 2016 年に僕あのエトロフ島に内閣府の訪問団の副団長で行きまして、

2017年に国後島、2019年に色丹島に行ったんですけど、ちょうどこの時の2019年の模様のニュースがちょっとありますので、ちょっと1分半ほどご覧いただけますでしょうか。

〔映像音声：ニュース番組。ナレーション「色丹島のホール...流れているのは日本の人気アニメ、セーラームーン。小さい子供から大人までノリノリ...実はこれ、北方領土ビザなし訪問での文化交流イベント、アニメオタク文化青年サミットです...神戸学院大学の岡部芳彦教授です...」岡部氏の音声「第4回アニメオタク文化青年サミット in 色丹を開会いたします...」〕

#### 【岡部芳彦】

このコスプレイベントは一昨年も国後島で開かれ、今回が2回目。会場で子供たちに人気だったのが漫画の描き方教室。指導したのは歌う漫画家としてロシアと文化交流を行っている富沢きらさん。実はお二人はこの戦争が始まる前からの私のゼミの卒業生でして、ゼミでロシアとの学生交流をしていたのでそのままボランティアとして参加してくれました。

これですね、皆さんこのニュースどうご覧になったか分からないんですけど、僕はこれはちょっとした事件だと思ってまして、ロシアが軍事占領する日本の島々で、これまでのビザなし交流でこんなに日本の文化が熱狂的に受け入れられたことってなかったんですね。これは本当に文化の力だなと改めて思いました。

ただですね、これ実はロシアの国境警備隊の人たちが僕のところにすごい怒ってきまして、なんで怒ったかという、僕が「ニッポン、シコタン！」って叫んだからなんですね。それはやっぱり、彼らからすると色丹島はロシアの領土だと言いたいのに、僕がニッポン、シコタンっていうのは政治的な主張だということで、これ以上言うなら強制送還だと言われたんですけど。僕はあの時、ニッポン、シコタンって言ったのは、日本と色丹島の若者の友情を願って言ったんだって言い訳して、まあなんとか許してもらったんですけども。ただやっぱりこういうところにもですね、文化交流の中にも政治的な緊張感があったというのは事実です。

この2019年終わりました。なぜかと言うと、これはロシアが軍事占領する島なんで、ロシアの市役所があって、ロシアの警察がいるわけですね。行く前にですね、根室でブリーフィングがあるんですけど、日本政府の同行者から色々説明を受けるんですけど、その時ですね、このイベントがアニメのイベントが「日本とロシアの友好のイベント」という言葉だけは絶対に使わないでくれということをこのイベントの時何回も言われたんですよ。日本人とロシア人の友好のイベントっていうのは構わないと。でも日本とロシアの友好のイベントって絶対言うなど。それなぜかと言うと、それを言った瞬間にロシア側は日本人がロシア領

土である色丹島に来てこのイベントやってますって言う可能性があるから、言葉は使わないでくれと言われたんですね。さっきのオタ芸をかかっていた人がですね、ライブの時にわーっと思すごくロシア人の子供たちが来て盛り上がっててですね、「ニ」って言ったんですが思い出したんでしょうね。ロシアって言えないなと思って「ニッポン、シコタン！ニッポン、シコタン！」ってわーって盛り上がったんですけど。ところがその日はロシア語で舞台袖で司会をしてたんですけど、そこにですね、ロシア人の大男の警察官が3人来て、すぐにやめさせろって言うんですよ。どうしてですかと。どうしてですかって言うと、政治的な主張してるじゃないか。どこがですかって言うと、日本の色丹って言うてるじゃないかって言われたんですよ。違いますよと、日本のじゃなくて日本と色丹ですよと。日本と色丹ですよって僕ロシア語で何回も言ったんですけど、聞く耳を持たずですね、大男の180センチぐらいの警察官が10センチぐらいのところで怒鳴ってるんで僕最初怖かったんですけど、今日ですね、大男の警察官がそんなロシア語知ってる日本人がいると思わなくて怯むんで、その日は全部イベントが終えたという形なんですね。ものすごくですね、疲れるんですよ。根室に戻ってきてもうこれ来年行くのやめよう。行くのやめようと思ったんですけど、我々は2020年の2月から同じ経験をします。コロナが流行り始めるんですね。色んなあったじゃないですか、ステイホーム、マスクしなさい、人とご飯食べちゃダメよ、家出ちゃダメよと。それでですね、僕も同じ状況で大学がオンライン授業になったりしたんですけど、1年ちょっと経った2021年の夏頃にまた内閣府から電話がかかってきて、岡部先生、2022年の夏頃にコロナが収まってたらもう一度あのイベントやりましょうよって言われて、ちょっと僕旅行嫌いですし嫌な思い出あるし今喋ってるからなんですけどどうかかなと思ったんですけど、人間って不思議なもので1年以上家に閉じ込められたら家から出たくなるんですね。いいですね、やりましょうよって言って準備を始めて。先の2022年2月24日にロシアによるウクライナ侵略が始まりまして、3ヶ月頃ですね、その4年前のゴールデンウィークに僕がロシアの入国禁止リストに入るという事態が発生しまして。ロシア岸田首相入国禁止、閣僚教授計63名で、教授って僕ですからね。入っちゃうと。これ今まで日本人対して誤解発信されるんですけど、1回目のリストには順位がついてまして、1位は岸田総理、2位は官房長官だったかな。世界外務大臣が続いて、ま当時自民党政調会長だった高市さんなんかも入って、50番台にはですね、週刊文春の編集長が入ります。これなぜかと言うと、世界に先駆けてロシアのラブロフ外務大臣の愛人問題を暴いたんですね。文春砲っていうのはグローバル文春砲だということで恐ろしい話なんですけど、まそんないろいろ続きまして一番下が63番で私62番だったんですけど。それでですね、あの、それから1週間して、あのロシアのですね、赤の広場で毎年5月9日にはナチスドイツに勝ったことを記念して軍事パレードが開かれるんですけど、その時ですね、フジテレビがどうしてもスタジオで解説してくれて、僕その頃家からニュースはリモートで解説が多かったんで大体台本決まっていますので、ニュースはですね、やってたんですけど東京行くのめんどくさいなと思ってリモートじゃダメですかえどうしても来てくれと。どうしても来てくれと言うんでおか

しいなと思って行ってみると、私の肩書きが変わっておりまして、「岡部芳彦、ロシア出禁リスト 62 番 (63 人中)」ってこんな肩書きが世の中にあるのかと思ったんですけど、隣を見るともっとびっくりして、中村逸郎、ロシア出禁リスト 63 番 (63 人中) って言うと、え、これこの 2 人をですね、フジテレビ並べただけじゃないかと思ってややフジテレビに不信感抱くみたい。まあ大体フジテレビのあの問題ってのは色ありましたがこういう体質から起因してると思ってるわけなんですけど。まああの、これは余談なんで話はしときました。

まああの、ただですね、僕まさか戦争の解説をする日が来るとは思わなかったんです。僕ウクライナの本当の専門はウクライナ人と日本人の交流の歴史なので。でも今はメディアに出るとどうしても戦争の状況の解説が多くなるので、最初ウクライナっていう言葉を発する時によく陽気で明るく美味しい国ウクライナという風に言ってました。ちょっとステレオタイプなんですけど、ウクライナ人から陽気な人が多くて美味しい食べ物がいっぱいあるちょっと次時間がないので飛ばすんですけど。

それですね、あの、日本からウクライナ見るとどうかと言うと、日本の隣の国って領土問題があるってロシアなんです。じゃその隣ってどこだろうかって考えると国境線を接して侵略を受けてるウクライナなんで、日本から見るとこれはですね、ウクライナっていうのは隣の隣の国って言えるんじゃないかと。僕はこれ 10 年以上前から流行らそうと思ってですね、一生懸命広報で言ってたんですけど全く流行らなかつたんですけど、この戦争が始まりまして民放のですね、7 時から 9 時までにやってる教養系バラエティ番組で池上彰さんが思いっきりパクってんの見てショックだったんですけど。池上彰さんはですね、やっぱ良心がありますよ。「日本のとある方がウクライナは日本の隣の隣の国って言うてる、僕もそう思いました」って言うたわけなんですけど、まこれは是非皆さんにもお使いを今後いただければなという風に思っております。

あそれですね、あのちょっと今日あの 1 つご紹介したいのは、やっとなですね、あのウクライナの発祥の郷土料理であるボルシチがですね、ロシア料理でなくウクライナ料理だということが知られるようになったことなんです。これあの長らくファミレスとか行ってもあつあつのロシア料理とかよく書かれてたんですけど、これあのユネスコの無形文化遺産にはウクライナ料理として登録されてます。これどうしてそう長らく思われてたのかと言いますと、これ実はですね、あのかつて交通が発達してない時にウクライナから直接物って日本に来ないので、ロシアに一度入ってロシアから来ると。じゃロシアのほうから来た料理だと。ロシアのほうから来た料理だと。これ 10 回繰り返すとロシア料理になりますので、まあそういうことにも起因してるかなという風に考えております。

さあ、えっとちょっとこれ、それで戦争が初めてウクライナに行ってからですね、何回行ったことあるのかってよく聞かれるんですが、先月で44回目になりまして、戦争が始まってから7回渡航してます。それで昨年の6月こんなことがありました。

〔映像音声：ウクライナ語のニュースまたは授賞式の様子が流れる〕

【岡部芳彦】

はい、あのウクライナ大統領賞「黄金の心」というのを受賞いたしまして、ちなみにあのこれいつ受賞すること知ったかっていうと10分前に知ったっていう。僕はちなみにあのこの時は兵庫県を代表してあの国際会議に出てただけでしたので、あのいきなり10分前に壇上上がってくれて言われたこれだったということなんですけど、まああのゼレンスキー大統領とはですね、とはいうものの何度かお会いしたことがあって、最初にお会いしたのは2019年9月13日。この時は彼が大統領に就任してまだ4ヶ月だったんですけど、この5年ほど前からウクライナ版ダボス会議って言われるヤルタ・ヨーロッパ・戦略会議というところに僕あのウクライナを研究する日本人、珍しい外国人枠で呼ばれるようになりまして、あの本当にこれあのダボス会議風なので、世界中のOB、現役の政治家が集まってウクライナの政治戦略をディスカッションするという会議でして、会場本当に歩いておられますと見たことあるような人が歩いててちょっとこんな事例で申し訳ないんですけど、1事例をご紹介しますと男性用のトイレで僕が用を足していると隣で用を足してる人がトニー・ブレア、イギリス元首相だったみたいな、そんな感じのオー・ボボボみたいな感じなんですけど。えっとですね、あのそんな人から、私のような者まで400人ぐらいで全員でですね、あの集合写真を撮る時間があるっての最初の年に知りまして。僕はあの最初の年は気後れして一番端に立ってたんですけど、さっき言った通り集中力がないんでぼーっと色々考えてたら、そうだと、これ2列目の真ん中に立ったら大統領の後ろだと思っていて。次の年は400分ぐらい前に1人で誰もいないとこで2列目の真ん中に立ってたんですよ。ただみんながわさわさっとこう集まってきて、あと5分ぐらいで大統領が出てくるかなって言う時に、あのそのスタッフのチーフみたいな人が僕の前に歩いてニコニコして女の人が歩いてくるんで何かいいことあるのかなと思ったら、「すいませんそどこいてもらえますか」って言われて、あのここダメなのかと思って3列目の真ん中に立つと何も言われなくて、この2019年の時も、えっとエストニアのカリユライド大統領、フィンランドのニーニスト大統領、ゼレンスキー大統領夫妻、クワシニエフスキ元ポーランド大統領、クチマ元ウクライナ大統領、ラスムセン元NATO事務総長、ビクトリア・ヌーランドアメリカ国務次官補、ま名前忘れましたが世界に有名な思想家みたいな人がいて、ゼレンスキーの後ろの後ろに僕がいるという、3列目にいるんですね。ええそれでちょっとですね、あのばらける時に、あの「写真撮ってください」って言うのと「いいよ」って言われて、あの横にこのこの位置で僕大統領こっちでこっちですね、立ったんですけど、あのちょうどSPの真ん中に入っちゃって、SP

は前に向かってるんで誰もシャッターを押してくれる人がいない状態になったんですね。でも僕は生まれて初めて自撮りをしようとした日って言えて、2019年9月13日。これ自撮りだなと思ってこう構えたんですよ。でびっくりしたんですよ僕やったことないんで僕の左手しか映らないんですよ。で、こうかなと思ってゼレンスキーの頭の、あゼレンスキーの左側頭部しか映りませんでして。すごく焦っていると私が手が動かなくなって僕が緊張のあまり手が攣ったのかなと思ったら、あの後ろの大統領主任警護官が僕がなんか大統領に危害を加える仕草をしてると思って手をがっちり押さえてるっていう状態で。でゼレンスキーがですねそれに「貸せ」って言って、あの彼が撮った写真がこの写真で、これ外から見るとこうなってるっていう感じなんですね。これあの1年ほど前なんですけど、とある講演会で、僕1年前は気づかなかったんですけど、ええご高齢の女性の方がこれすごくいい写真ですねと、どうしてですかって言うと、先生の手を恐らく取り押さえてたであろう主任警護官が気まずそうに僕に写ってるじゃないかと言われて、確かにそうだなと思ったわけなんですけど、えそれですねあのままこれ2019年のことなんですけど。その後1ヶ月半ほどしますと、天皇陛下がご即位をされまして、えそのですね、あの即位の礼にゼレンスキー夫妻は国賓として来られまして、ま僕もありがたいことで朝食会にお招きいただいてビシバンカ、ビシバンカですね、今日と同じ服着て、えっと行きますと、まお偉い政治家の方ばかりだったんで気後れしてまた一番最後にただの1分立って待っておりますですね、ゼレンスキー入ってきまして、僕の前にいた瞬間にですね、あ、セルフイーマンだ！と自撮りマンだ！って言ったんですね。ええそれで覚えてますか大統領って言うといやいやあんた1ヶ月前のことだから覚えてるよと言われて、でも何かそれお土産上げないといけないなと思って前月にとった写真を引き伸ばしてゼレンスキー大統領日本へようこそ岡部芳彦って言ってあげたと。えそれですね今年の6月こんなことがありました。この壇上で僕ゼレンスキーと結構長く喋ってたんで、よくウクライナ人に何を喋ってたのかって聞かれるんですけど、実は壇上上がった瞬間何て言われたかって言うと、「久しぶり元気」って言われたんですね。僕もちろんゼレンスキー覚えてるわけありませんので、おそらく有能な秘書の方がいてですね、あの人に会ったことがあります大統領とか言われたんですけど、僕まあ何と答えたてまあスライド上「はい元気です」と言ったように覚えがあるんですけど、とっさだったんで僕あのなんとなこう言ったんじゃないかなってのは「まあまあですね」みたいな答えをちょっとしてしまったような、そういうこともございました。

さあ、あと5分で最後になります。ええ、最後と2、最後と日本とウクライナ今僕らにできることってということなんですけど。まああまり知られてないんですけど、実はあの兵庫県、神戸市は非常にウクライナとの交流が盛んな場所となっております。まあの、実はあの日本で一番最初にウクライナ避難民を受け入れるって言ったのは姫路市だったんですね。で、これはちょっと事情がありまして、これも飛ばすんですけど。あの姫路城には世界で21カ国語のパンフレットがあるんですけど、この時点で日本で唯一、ええ公式パンフレット持って

るのが姫路城だけだったという、そういうウクライナ語のパンフレットですね。そういうこともありまして受け入れを表明しました。ええそれですね、あの兵庫県にあの初めてウクライナ人の避難民っていうのが、あ避難民って言っちゃいけないんですけど、避難してきた大学生っていうのが来たのが 2022 年の 6 月のこと。ちょっと来た時の動画を見る間がないんですけど、あんなトライノさん。ええ今日司会をしてくださる女性です。で彼女はですね、まあの、うちの大学に来てですね、まあの先生もあの一緒にあの 9 月。

〔映像音声：ニュース番組の音声。アナウンサー「神戸市中央区の神戸学院大学...避難してきた大学生...」アンナ氏のインタビュー音声などが流れる〕

#### 【岡部芳彦】

はい、あの先ほどご紹介した通り、あんなトライノさん、4 年前にウクライナから避難をしてこられて本学で学部とで卒業をしてたんですけど、2 年前にあの本学の間人文化学研究科の修士課程に合格をしまして、大学院に 2 年間行かれて、この 3 月に卒業をされて、下この先先月 4 月からですね、神戸学院大学の特命助教としてこの隣にあります松口正記念ウクライナ研究センター所属で勤務をしております。まこれまさにですね、この神戸にやってきた学生がですね、避難してきた学生が、ま神戸で新しいステージを見つけるという非常にいい例じゃないかなっていう風に思っております。

はい、えっとちょっとこれ時間がないので飛ばすんですけども。

これ最後になります。ええ。さああの神戸とウクライナ最後ちょっとお話をするんですが、ご存知の通り、あの神戸市とリビウ市は復興協定に関する意思確認書名をしております、リビウの市長は実はほぼ毎年来ております。ええそれでですね、あの今日もちょっと申し上げるんですけど、あの色々期待があるんですけど、今特に先月、ええウクライナ大使がですね、新任のルトビノフ駐日ウクライナ大使が神戸市役所を訪れましてですね、まあのこれからリビウとの関係を含む神戸市とウクライナの関係を深めてほしいというお話もあったんですけど、その時ですね、あの消防車をですね、中古車を提供してもらえないか、いらなくなったものでいいのでという提案がありまして、まあの市長さんは、前向きに検討するということで今ウクライナに送る方向で検討が進んでると聞いておりますので、こんな活動も今進んでおりますので、今後とも皆さんのご尽力をですね、お願いしたいなっていう風に思っております。

じゃああの私のパートはこれで終了となります。どうもありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

【岡部芳彦】

それじゃマイクの方お返ししますと。

(拍手)

【河南忠和】

岡部先生、ありがとうございました。それじゃイリーナさん、もう一度拍手お願いいたします。

(拍手)

【河南忠和】

はい。えっとじゃあこの後レセプションに入る前、集合写真を撮る形でよろしいですか。ええ。乾杯の前。乾杯の前。はい。じゃああの皆さんじゃあ外の、今のウクライナの。そうですね。えっとちょっとあの豪内のあの施設の案内をしますので。はい。レセプションからお待ち。荷物はここに置いててよろしい、大丈夫ですか。はい。じゃああの荷物は置いてて結構なんで、えっと外のほうの展示物を拝見したいと思います。よろしくお願いいたします。

\*\*\*

〔※以降、イリーナ氏とアンナ氏のスピーチセッション〕

【イリーナ氏】

It's a pleasure to be here today. Hello everyone. Anna-san will help us today with translation, and I will address you very briefly.

\*\*話者 D\*\*

本日はここにお招きいただきまして光栄に思っております。通訳を務めさせていただく、トライノ・アンナと申します。よろしくお願いいたします。

【イリーナ氏】

I will start far from home, both yours and mine, in Budapest, Hungary. If you walk along the Danube river, you might witness a strange sight. On one part of the embankment, there are dozens of shoes lined up just at the water's edge. Men's shoes, women's shoes,

children's shoes. Some new, some worn out, some trendy, some old-fashioned, all of varying sizes. The image is puzzling. Where have the owners of these shoes gone? Did anything happen to them? It might take one a while to realize that the shoes are made of bronze and that the whole site is a memorial to the Jewish people who during the Second World War were taken by the Nazis to the riverbank and asked to take their shoes off before they were shot and their bodies dropped into the river. These people had no value for the perpetrators, but their shoes did. Shoes could be resold.

【アンナ氏】

私の故郷からも皆様の故郷からも遠く離れた場所からお話を始めたいと思います。ハンガリーのブダペスト、ドナウ川沿いを歩くと、不思議な光景を目にするかもしれません。川岸の端に並べられた無数の靴の記念碑を目にします。男性用、女性用、子供用、新しいものから古いものまで様々です。これらは第二次大戦中、川岸に連行され、銃殺されて川に投げ落とされる前に靴を脱ぐよう命じられたユダヤ人犠牲者のためのブロンズの記念碑なのです。加害者にとって彼らの命には価値はありませんでしたが、転売できる靴には価値がありました。

【イリーナ氏】

It is details like this that make a war into a personal thing for an observer who perhaps has never experienced armed conflict him or herself, and might know little about the people whose lives have been or are being ruined through this acts of aggression. It is hard to imagine six million people losing their lives. This number is the estimate of European Jews murdered in the Holocaust. However, when one looks at a pair of fancy high-heeled shoes left behind perhaps by a vivacious young woman who will never dance in them again, the loss of that life, of that one woman of many, many more, is suddenly acutely felt. Cast in bronze, her shoes remind us of the uniqueness and preciousness of human life. They make the far away war suddenly somewhat personal, suddenly relatable.

【アンナ氏】

このような細部が、戦争を経験したことのない観察者にとって戦争を個人的な出来事として感じさせます。ホロコーストで犠牲になった 600 万人という数字を想像するのは困難です。しかし持ち主を失った美しいハイヒールを見た時、二度と踊ることのない一人の若き女性の命の重みが突如として胸に迫ってきます。ブロンズの靴という芸術が、遠く離れた戦争を身近で個人的なものにしてくれます。

【イリーナ氏】

This is what art can achieve in the times of war. It reminds us how universal loss is in the human experience, and how immeasurable the pain felt is, even if it is just by one human being. A film that makes you cry watching someone else's farewell embrace. A bronze pair of shoes that tells a story. A poem that captures a fleeting moment otherwise forever gone, that traces lovingly the face of that special someone, a lover, a parent, a dear friend, whom the war perhaps has taken forcibly from the poet once and forever.

【アンナ氏】

これこそが戦時下において芸術が成し遂げる力です。芸術は喪失という経験がいかに普遍的であるか、そして一人の人間が抱えている痛みがどれほど計り知れないかを教えてくれます。物語を語るブロンズの靴、別れの抱擁を描き涙を誘う映画、そして戦争によって永遠に奪われた愛する人の面影を記録する詩。これらはすべてその力を証明しています。

【イリーナ氏】

In the fateful year of 2014, when the war in Ukraine first broke out, long before the brutal invasion of 2022, Ukrainians suddenly found that their collective grief for the lost loved ones was best expressed by a very old and obscure folk song created some few centuries prior. In this song, a young man leaving home shares his sadness with his mother. He asks his mother not to begrudge him if he dies far from home. And she replies, 'how can I hold this against you, my son? You who have lain on my heart.' Few people knew this song in Ukraine before 2014, and then suddenly everyone knew it. And an unknown son and mother's grief from hundreds of years ago spoke to the contemporary Ukrainians whose pain of today was finally captured and validated.

【アンナ氏】

2014年、ウクライナ東部で戦争が始まった時、ウクライナ人は何百年も前に作られた古い民謡の中に自分たちの悲しみを見出しました。故郷を離れる若者が遠くで死んでも恨まないでほしいと母に伝え、母がどうして恨むことができるだろうかと答える歌です。それまではあまり知られていなかった歌の聲が、時を超えて現代のウクライナ人の心に深く刻まれたのです。

【イリーナ氏】

So artists are truly unique in this ability not only to help us express our deepest and most complicated emotions, but also to make those emotions comprehensible and relatable for others. Literature in particular enables us to live the lives of people whose

thoughts, feelings, and experiences we would hardly know otherwise. A poem can open a door into someone's head and heart and life. A professor at one of the universities in Tokyo once told me about an assignment that he gave to his students. He asked them to write a letter to a Ukrainian poet in response to one of the war poems that they read in class. And he said the poems that resonated with the students most described a woman simply going through her day-to-day chores, cooking, washing dishes, just going around the house, all while living through the terrible reality of the war. And it was the power of those very simple images of daily life that enabled a group of Japanese twenty-something-year-olds to feel the pain and worry and resilience of that Ukrainian woman. And it was poetry, it was literature, it was art that had built that bridge of empathy and understanding.

#### 【アンナ氏】

芸術は、距離や時間を超えて感情を伝える独自の力を持っています。文学は特に全く未知の誰かの心や人生を体験させてくれます。ある東京の大学教授がウクライナの戦争の詩を読んで手紙を書くという課題を学生に出しました。日本の若者たちの心に最も響いたのは、戦禍の中で料理や掃除という日常の家事をただこなすだけの女性が描かれた詩です。詩という芸術が日本の若者たちとウクライナの若者たちとの間に共感と理解の架け橋を築いてくれました。

#### 【イリーナ氏】

It is no accident perhaps that in this war of aggression against Ukraine, Russia targets Ukrainian culture so blatantly and persistently, turning historical buildings to rubble with its air strikes, burning libraries, murdering writers who like Volodymyr Vakulenko refused to renounce their Ukrainian identity under the Russian occupation, or who, for example, like a young poet Maksym Kryvtsov, have taken up arms to defend their country. Russia wants to destroy Ukrainian culture precisely because it knows the culture's power to produce compassion and empathy and solidarity, including on the global scale. Poetry, among other art forms, helps us, the Ukrainian people, speak to you, people of other countries outside Ukraine, of what it really feels like to have not just one's land and one's life, but one's very memory and identity viciously and relentlessly attacked.

#### 【アンナ氏】

だからこそロシアはウクライナの文化を執拗に標的にしているのです。歴史的な建物を破壊し、図書館を燃やし、ウラジミール・ワクレンコやマクシム・クリフツォフのような誇り高い作家や詩人を殺害しています。ロシアは文化が世界的な連帯や共感を生み出す力を持

っていることを知っているのです。詩をはじめとする芸術は、記憶やアイデンティティを攻撃される痛みをウクライナから世界中の皆様へと伝える助けとなってしまっていることを知っています。

【イリーナ氏】

So it is through culture, through poetry today that I extend to you a gesture of gratitude for your support of Ukraine at this crucial point in my people's and quite likely global Europe's history perhaps. We are meeting here in Kobe at the time when in just this past month, Russian bombardments not only killed multiple civilians including children, but also destroyed, among others, the museum of the Chernobyl nuclear catastrophe in Kyiv, including its vast archive, turned to ashes the largest collection of thousands of historical film costumes at the Dovzhenko Film Studio in Kyiv just a few days ago, and exposed to flames and ruin one of Ukraine's most important religious monuments and a UNESCO World Heritage site, the Kyiv Pechersk Lavra monastery. So at this critical juncture, your continued support of Ukraine can help to save lives and preserve priceless historical and cultural monuments and stop Russia's neo-colonial expansion into Europe and beyond perhaps. And while on this mission it is culture, literature, poetry that can help us build bridges of solidarity, empathy, and shared humanity between Ukraine and Japan. So I thank you for this.

【アンナ氏】

今日ここで神戸で、私はウクライナと詩を通じて皆様のウクライナへの支援に深い感謝を表したいと思います。この1ヶ月の間にもロシアの攻撃により多くの市民が犠牲になっています。子供たちも、チェルノブイリ博物館の貴重な資料、ドヴジェンコ映画スタジオの歴史的な衣装、そして世界遺産であるキーウ・ペチェールシク大修道院が破壊されました。この貴重な歴史の岐路において、皆様の連続的な支援は命と文化を救い、侵略を止める大きな力となっています。そしてその道において文学や詩、文化こそがウクライナと日本の中に連帯と共感、そして人類共通の人間性という架け橋を築いてくれると信じています。ありがとうございます。

(拍手)

【岡部芳彦】

どうもありがとうございました。あのちょうど今あの最後の事例で出たんですけども、あの昨日今日はモスクワを空爆してるみたいなことが話題なんですけど、実はその2、3日前にですね、世界遺産であるペチェールシカ修道院という非常に古い修道院にロシアのドローン

が落ちまして、屋根が全焼してしまいました。これあの恐縮いただきたいんですけど、姫路城の上半分が燃えちゃっておるような状態です。これあの戦争中なんですけども、ただあのこのイリーナ・シュバロワさんですね、詩人でありますけども、結構ウクライナは先ほど申し上げました通り、長らくボルシチっていうのはロシア料理だとされたんですね。これはある意味ウクライナ発祥だということをロシアが隠してたっていうようなこともありまして、文化を奪うっていうことがやっぱりその国民の存在を消す第一歩なので、そういう意味では文化活動っていうことこそこの戦争中で、ありながら大事だということをいつもウクライナの文化人の方は強調されております。そんなこともありまして今日はちょっと皆様の研修にお話をさせていただきました。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

【河南忠和】

それではマイクの方お返ししますと。

【岡部芳彦】

岡部先生、ありがとうございます。イリーナさん、もう一度拍手お願いいたします。

(拍手)

【河南忠和】

はい。じゃあこの後レセプションに入る前、集合写真を撮る形でよろしいですか。はい。じゃあ皆さん外の、今のウクライナの。そうですね。ちょっと豪内の施設の案内をしますので。レセプションから。荷物は置いててよろしいですか。はい。じゃあ荷物は置いてて結構なんで、外の方の展示物を拝見したいと思います。よろしくお願いいたします。